ご 挨 拶

日本血管病理研究会 第19回学術集会
当番世話人　**小林 茂人**
順天堂大学医学部附属 順天堂越谷病院 内科

日本血管病理研究会の会員の先生方、まだ会員ではない先生方も、ますますご健勝のことお慶び申し上げます。おかげさまにて、日本血管病理研究会 第19回学術集会を、平成26年10月4日（土曜日）、両国のKFC（国際ファッションセンター）ビルにて開催させて頂きます。

血管炎の治療には、これまで大きな難題が山積みされた中で、ガンマグロブリン製剤やリツキシマブ治療が日本で承認されました。また、生物学的製剤を使用した大型血管炎や川崎病に対して臨床治験が進んでいることを耳に致しました。その他に有望な候補の治療薬も数々報告されています。これは、まさしく、血管炎治療のパラダイム・シフトが実現されつつある現状と考えられます。今回、天理よろづ相談診療所・総合内科部長・膠原病センター長の八田和大先生に、特別講演1で「血管炎に期待される新規治療」のご講演を頂きます。血管炎や血管障害に対する新しい治療薬の新たな可能性が理解され、明日の、近い将来の治療に役立つと考えられます。日本からで出た治療薬の治験を発展させ、外国での治療薬を日本でもできる限り早く使用可能な環境を整えることが、海外の臨床や学問の研究に取り残されないために非常に重要なことと考えられます。

血管炎の病態・病因は、環境因子や遺伝因子などが関与するなか、発症機序にかかわるさまざまな発見が報告されています。難治性血管炎は希少疾患であり、病態・病状もさまざまな患者の血液の中から診断に重要な遺伝子マーカーを探すことは、宇宙の中で小さなダイヤモンドのかけらを見つけるような、途方もなく困難なことと考えられます。特別講演2では、大阪大学微生物病研究所・分子遺伝研究分野（感染症DNAチップ開発センター）の野島 博先生に、「難治性血管炎の診断・治療に有用な新規マーカー遺伝子の同定」と題したご講演を賜ります。今後、この分野からのアプローチによって、いわゆる“sarrogate”ではない、“真の”診断や治療のマーカーが次々と明らかにされることが期待されます。

ANCA関連血管炎では、好中球の細胞外トラップ（NETs）の機序が明らかになり、日本からも石津明洋先生のグループからこの機序に関する新しい発見が報告されました。石津先生にお願いして、シンポジウム「ANCA関連血管炎と好中球細胞外トラップ（neutrophil extracellular traps（NETs）を正しく理解する」をご企画して頂きました。吉田雅治先生、中沢大悟先生、平橋淳一先生が、臨床現場から基礎研究までの新しい発見をわかりやすく解説して頂き、また、ラクトフェリンによる新規治療の提唱が発表されます。

一般演題は15演題を頂戴いたしました。このなかで、東邦大学呼吸器内科の本間 栄先生には、欧米の呼吸器学会では認識されていない「肺限局MPA」を、自治医科大学さいたま医療センター耳鼻咽喉科の吉田尚之先生・飯野ゆき子先生には、現在、日本の耳鼻咽喉科学会が欧米に先駆けて分類基準、診断と治療のガイドラインの作成を推進されている「ANCA関連中耳炎」の演題のご発表を、私からお願いして、ご多忙中にもかかわらずご発表頂きます。このために、どうぞ、朝9時35分からご出席頂ければ幸いでございます。

今回は、治療のパラダイム・シフトの立ち位置を起点に、特別講演1では、帝人ファーマ株式会社が、特別講演2では、全薬工業株式会社・日本化薬株式会社にご共催頂きました。さらに、多くの製薬会社には抄録集の広告のご協賛頂きました。厚く御礼申し上げます。

「医学は医師だけのものではない」と日野原重明先生が明言されております。どうぞ、みなさまご一緒に、Unmet needsの問題点に立ち向かいたいと思います。ご理解・ご協力の程、何卒よろしくお願い申し上げます。

平成26年8月吉日